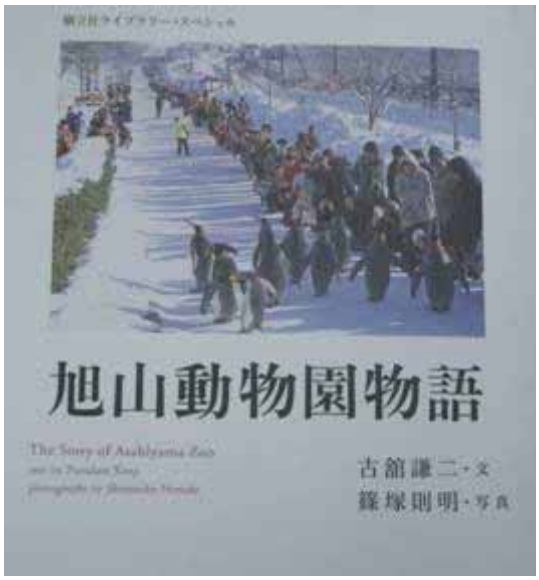
『旭山動物園物語』を読む



いま動物園のなかで最も注目されているのが、北海道のほぼ真ん中に位置する旭川市の旭山動物園である。昨年度は、前年度より 62 万人余り多い約 145 万人の入園者があり、大阪市の天王寺などを追い抜いて全国の動物園で 7 位から 3 位に躍り出た。2 位の東山動物園に迫りつつある。夏場の 7 月と 8 月には、東京の上野動物園を抜いて日本一になった。この旭山の躍進ぶりについて、美しい写真を使って探ったのが『旭山動物園物語』(樹立社、05 年 3 月)である。

旭山動物園は一度は閉園に追い込まれたが、現場の職員の必死の努力とアイデアにより、ここまで盛り返してきた。その核心は「行動展示」というアイデアである。95 年に就任した小菅正夫園長は次のように説明する。「動物園の動物はいつも寝てばかりいてつまらないという不満の声が気になっていました。-----それならこれまでの見せ方や運営方法にとらわれず、動物のやりたいようにやらせれば、動物本来の動きや能力をもっと引き出せるのではないかと考えたのです」

「行動展示」により入園者数を日本一に導くきっかけとなったのが「あざらし館」である。ここには高さ 3 メートルの円柱水槽があり、アザラシを間じかで見ることができる。私の好きなサルも「そのまんまを見せる」ようになっている。そして本の表紙のように、キングペンギンの園内散歩などだ。

この本はたんに動物園再生の方向だけでなく、そこで働く市職員の努力とアイデアから、自治体職員の職場と仕事のあり方など多くのことを考えさせられた。

(6 月 26 日　記)